

学位論文要旨

幼稚園における保護者の保育参加と保育参画に関する研究
— 保護者と保育者の関係性の変容に着目して —

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 教育学分野

D173577 田中 文昭

序章 問題の所在と研究の目的

幼稚園と家庭の連携を図る一つの方法として、幼稚園教育要領解説（2018）には、保護者の保育参加（以下、保育参加）が明記されている。また、保育参加は保護者の学びだけではなく、保育者にも学びがあることが明らかにされている（島津，2014）。このような幼稚園等（以下、園）での保育参加を保護者と保育者の関係性という視点から捉えた場合、保育参加は保護者と保育者が互いに影響を及ぼし、育ちあいながら理解を深め（長谷川，2016）、子どもを共に育て合う認識の醸成に役立つ（島津，2014）ことから、保育参加はコミュニケーションの機能を有していると考えられる。また、保育参加により保護者のみならず保育者も変容するものであることが明らかにされている（島津，2014）。しかしながら、それぞれの変容がどのように連携と関連しているのかは明らかにされていない。また、先行研究では保育参加直後の保護者の感想文や語りが主な分析対象とされており、参加を経験していない保護者については着目されていない。保育参加にコミュニケーションの機能があるとするならば、参加に消極的な保護者や継続参加するような積極的な保護者に焦点をあて、その要因や意思決定のプロセスを探ることで、子育て支援としての機能を促進させ、島津（2014）が指摘する、保育に深く参加したいという保護者の意欲を反映させる方策が提示できるのではないかと考える。さらに、保育参加以上に深く保育に関わる形態である保育参画は、わが国では、ほとんど研究されていない（池本，2014）。保育参画による両者の変容と連携との関連については明らかになっておらず研究の余地がある。しかし、このような支援は保護者連携という園主導の意識（島津，2014）を知らず知らずのうちに一方的に押し付けるという危険性もある。

以上より本研究では、幼稚園での保護者の保育実践への参加に着目し、保育参加と保育参画による保護者と保育者の変容を捉え、それぞれの変容によって両者の関係性がどのようになるのかを明らかにすることを目的とした。また、子育て支援としての機能を促進させ、保育に深く関わりたいという保護者の意欲を反映させる方策も検討した。本研究により保護者のみならず保育者の変容を明らかし、保護者と保育者との関係性を幼稚園の保育参加と保育参画という観点から明らかにすることを目的とする。

第1章 園の立場から見た保護者の認識、保護者の保育実践への参加、保護者会（PTA）、子育て支援、保護者との関係性に関する意識調査

園と保護者の関係性の現状を明らかにすることを目的として、全国の幼稚園や認定こども園等の幼児施設の管理者を対象に質問紙調査を実施し、132園から回答を得た。データは因子分析や記述統計によって分析を行った。

分析の結果、各園の保護者との連携は直ちに機能不全に陥るといったような状態ではないが、将来的に連携に関する機能が弱まっていく可能性があると考えられた。園側は保育を知ってほしいと考えていても保護者が園にいることをあまり好まず、保護者と保育者の交流は多数の保護者へと発展しにくい現状と、保育内容を理解している保護者は多いと園は思

っているが、保護者との対話が減ってきているという現実から、双方向のコミュニケーションが活発に行われているとは考えにくく、園から保護者への一方向の情報伝達になっている可能性があると考えられた。また、保護者会（PTA）の役員など一部の保護者との間のみ園との関係性が形成されていた。さらに、保護者会（PTA）の役員が決まりにくくなったり、保護者との関係性が築きにくくなってきたりしていること、そして、保護者との現状に満足しているわけではないという状態から将来の保護者と保育者との連携の危うさが見られた。一部の保護者との関係性においては、苦慮する部分が見受けられるが、現状においては、大きな問題点があるとは言えないものと思われた。しかし、現状に満足しているのではなく、保護者との関係性をより良いものにしたいと園は考えているが、その具体的な方法が見つからず、現状を維持しているのが、多くの園が置かれている状況であると推察された。

第2章 研究の方法

本研究は、エンゲストローム（1999）によって展開された活動理論を理論的枠組みとして用いた。活動理論は、人間の生活を形成する全体的な活動を「活動—行為—操作」の3つに分けてとらえる枠組みである。エンゲストローム（1999）は人間の活動を個人ではなく集団で捉え、人間の活動の構造を「主体」、「共同体」、「対象」に人工物である「道具」、「ルール」、「分業」を加えた6つの要素で活動システムとしてモデル化（以下、活動システムの三角形モデル）した。本研究は、幼稚園での保護者の保育実践への参加に着目し、保育参加と保育参画による保護者と保育者の変容を捉え、それぞれの変容によって両者の関係性がどのようになるのかを明らかにすることを目的とした。その際に、保育参加、保育参画、それぞれの一時点における集団活動を活動システムの三角形モデルで描き、それら2つの三角形モデルを比較し、保育参加と保育参画による保護者と保育者の関係性を考察した。

本研究では、質的研究を主とし、量的研究を補完的に用いた。このような研究デザインにした理由は、質的研究だけでは答えることができない問いに量的研究を補完的に用いることで、その問いに答えることができると考えたからである。

第3章 幼稚園における保護者の保育参加

本章の目的は、保育参加による保護者と保育者の変容を両者の関係性の観点から考察し、両者の変容によって共同体としての幼稚園がどのようになるのかを明らかにすることであった。本章では、2つの研究を行った。一つは、保育参加を経験した4園の保護者273名を対象に、保育参加を経験した印象や感想などを5件法による質問紙で尋ねた。因子分析を行い、抽出された因子間の関連や因果関係をパス解析により明らかにした。もう一つは、2園の保育参加を経験した8名の保育者にインタビュー調査を行った。保育者の語りを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）により分析し、保育参加によって保育者の変容していく様相を明らかにした。

分析の結果、保護者への質問紙による調査では、保育参加によって、わが子や幼児に関する気付きや理解があることで、園・保育者の理解や親としての成長へとつながり、それが園への積極的な関与を促進させていた。

保育者のインタビュー調査からは、活動システムの三角形モデルを用いて捉えると、取り組み体制がルールとしての役割を担っており、保育者を支える取り組み体制が保育者の学びが生起する上でも重要であることが明らかとなった。また、参加保護者が保育参加を経験することで保育者に対して表す言動（参加保護者からの返報）が道具となって、保育者個人の学びから保護者との関係性に関する学びを含んだものへと学びが拡張していくものと考えられた。一方で、その返報が保育者への非難であった場合には、保育者の学びは拡張せず、反発へと向かうことが示唆された。

第4章 保育参加への消極的要因と継続参加の意思決定プロセス

本章では、保育参加に未経験の保護者と保育参加に継続参加した保護者に焦点をあて、誰もが参加しやすい子育て支援としての形態と、保育に深く関わりたいという保護者の意欲を反映させる方策を検討することを目的とした。

そこで、本章では、2つの研究を行った。一つは2園の保育参加への未経験者101名を対象に質問紙調査を実施し、不参加につながる要因を明らかにした。もう一つは、継続参加する保護者に着目した。4名の保護者にインタビューを実施し、複線径路等至性モデリング（以下、TEM）による分析を行い、保育参加への参加動機から継続意思決定に至るまでの保護者の意識の様相を捉えた。

分析の結果、参加への消極的な理由や改善点の記述から、保育参加への消極性は、物理的要因と心理的要因があることが明らかとなった。物理的要因としては、「未就園児の預け先」、「実施時間の長さ」、「実施内容の説明が不十分」が、心理的要因としては、「1クラスに1人での参加」が課題として浮き彫りになった。少数であったが、「責任もあり気を遣う」など他児と関わることへの不安などは、保育者としての立ち位置で参加することが求められるルールが影響していた。このような心理的要因に関しては、保育ボランティア等の現状の保育参加とは異なる新しい活動システムでの参加が検討できると想定された。

継続参加に関しては、TEMを用いて分析することにより、参加動機から継続意思決定までの保護者の意識の様相を明らかにすることができた。また、保護者が保育参加を経験することで、自分の信念や親主導の思考などの自分よりの姿勢とわが子の気持ちに寄り添う姿勢とが衝突し、保護者の心に葛藤が起こっていた。保護者は自分自身の価値観や信念を大切にしながらも、子どもの気持ちに寄り添う大切さを忘れないために、保育参加を自分自身のリセットの機会と捉えることで、継続参加していた。このように保護者の心のうちに起こる自分よりの姿勢とわが子の気持ちに寄り添う姿勢とが衝突して生じる葛藤が継続参加を促す一因になっていると考えられた。

第5章 幼稚園における保護者の保育参画

本章では、意思決定過程より協働する保育参画を経験した保護者と保育者の変容を明らかにすることで、両者の関係性を考察し、幼稚園という共同体の変容を明らかにすることを目的とした。

本章では2つの研究を実施した。保育参画を経験した幼稚園の保護者5名と保育者5名それぞれにインタビューを行い、M-GTAによりデータの分析を行った。

分析の結果、保護者の語りでは、保育参画を経験した保護者の変容の様相から、参画しやすい環境整備にはソフト面とハード面があり、システムだけの改善では参画しやすい環境とはならないことが明らかとなった。情報開示の不足により、保護者に保育参画のネガティブなイメージを生起させている懸念も明らかとなった。人と人がゆるやかなつながることが、保育参画への参加を促進させる働きがあると考えられ、保護者同士が園内で知り合える機会の提供が風通しのよい雰囲気醸成に役立つものと思われた。風通しの良い雰囲気が醸成されることで、保護者は、自分なりの楽しみを見つけ、それが継続参加の一因となることが示唆された。

他方、保育者の語りからは、活動システムの三角形モデルを用いて保育参画を捉えると、保育者が主体である場合、枠組みの存在、目的の共有、適度な自由、(保護者の)やりたい気持ちのバックアップが保育参画におけるルールとして必要であり、分業により最終決定は園が行い、保護者との対話と協働が道具として機能することで保育参画が成立していた。一方で、保護者を主体として保育参画を捉えると、枠組みの存在と目的の共有がルールの役割を担っていた。保護者と保育者に共通している、枠組みの存在と目的の共有は両者の関係性の観点から見た場合、重要なルールであると考えられた。しかしながら、このような制度や目的はそれぞれにおいて共有されにくく、その意義が伝わり切れていないことが明らかとなった。このような活動の中で、園という共同体において、保育参画という活動を通して、上述したような活動システムにより、保護者と保育者に一緒に活動したという感覚が生起した結果、互いに一体感の醸成をもたらすことになったと考えられた。

終章 総合考察

本研究では、幼稚園での保護者の保育実践への参加に着目し、保育参加と保育参画による保護者と保育者の変容を捉え、それぞれの変容によって両者の関係性がどのようなものかを明らかにすることを目的とし、加えて子育て支援としての機能を促進させ、保育に深く関わりたいという保護者の意欲を反映させる方策も検討することを目的とした。

分析の結果、得られた知見を次に示す。

第一に、保育参加による気付きや理解には獲得の順序があり、わが子や幼児の理解が園・保育者の理解へつながり、園への積極的な関与が促進されることが明らかになった。ここから、保育参加では、保育者自身が園や自分自身を保護者に理解してもらうことを目的とするのではなく、わが子や幼児に関する気付きと理解を目的とした保護者主体の保育参加であ

ることが保護者と保育者の関係性の観点からは重要であると考えられた。

第二に、本研究では保育者にも焦点をあてた研究を行ったことから、保育者の保育参加に対する意識の様相を明らかにすることができた。その結果、実施にあたり、保育者の心の揺らぎや葛藤が明らかとなり、保育者を支える取り組み体制の整備が保育者の心の揺らぎや葛藤を軽減し、保育者の学びにつながるものと考えられた。保育参加によって、保育者には「学び」とともに「不安」や「とまどい」といった心の揺らぎや葛藤が生じていることが意識化された。岩本・齋藤（2016）等の先行研究では、保育参加による参加保護者への効果といったポジティブな面が強調されているが、保育者と保護者の関係性の観点から保育参加を捉えると、実施の際には保育者を支える取り組み体制も必要であると考えられた。

第三に、保護者と保育者の関係性には保育参加による参加保護者からの返報が大きな役割を担っていることが明らかになった。保育者側から保育参加を捉えた場合、活動システムの三角形モデルを用いると参加保護者からの返報が道具となって、保育者の学びを個人の学びから保護者との関係性を含む学びに拡張させ、結果として両者の関係性が縮まる可能性が示された。

第四に、保育参画では、保護者だけの運営で保育実践を行うことは、保護者が望んでいる形態ではないことが明らかになった。一方で、園主導で意見が言えない保育参画も保護者が望んでいる形態ではなかった。島津（2015）が保育参加に潜在する課題等に関して指摘する、議論の機会とその過程を経ることの重要性に加えて、次の条件が必要であった。（1）保護者が意見を言える機会や柔軟な参加形態といった保護者にとっての自由度があること、（2）最終的な責任は園が取ること、（3）活動の目的を保護者と保育者が共有すること、（4）対話と協働によって保護者と保育者が一緒に活動しているという感覚を持つこと、の4つの条件が活動システムに存在していることが重要であった。保護者にとっては、すべてを園に決められてしまうのではなく、意見が言える場が欲しいと考えているが、すべてを任せられると負担が大きくて手に負えない。そこで参加したい気持ちを支えてくれる体制やシステムがあることで、保育参画への参加を後押ししていた。保育者にとっては保育参画前と比べると、この取り組み体制によって負担が増えるが、活動への関与が高くなる分、積極的に取り組むことができ、気持ちの上でやりやすいものになることが明らかとなった。保護者と保育者が活動の目的を共有し、枠組みの存在があることが保護者のみならず保育者にとっても心地よい環境となっていた。また、対話と協働の経験が保護者と保育者との関係性を以下のように発展させていた。互いがコミュニケーションを取り、一緒に活動していると感じられるような経験をすることで、両者に一体感が醸成されるものと考えられた。これは、時と場所を共有するだけでなく、活動において、コミュニケーションを取りながら互いの異なる立場を理解し、両者がつながっていくことによるものであると考えられた。一方で、保育参画によっても越えられない保護者と保育者の壁が存在することが明らかとなった。

本研究の課題と限界

本研究の課題を次に示す。

第一に、本研究は保護者と保育者の関係性が安定している園が研究対象であったため、保育者と保護者の安定した関係性に関する事項を数多く見出すことができたが、両者の関係性のみに着目した結果、子どもの姿については、検討することができなかった。保護者の保育実践への参加は、両者の共通の目的である子どもの幸せ (well-being: OECD, 2018) を願うものであるとするならば、今後の研究では、子どもの姿を捉えた上での両者の関係性について検討が必要であろう。

第二に、本研究は4つの園を対象とした研究で構成されている。一般的な保護者への保育参加と社会的な課題となっている保護者会から変化した保護者の保育参画を研究対象とした。質的研究と量的研究を組み合わせる研究を行ったが、本研究で得た知見は、ある園における限定化された知見となっている。そのため、地域性や施設の類型、あるいは在園している保護者、働いている保育者等によって、結果は異なり、一般化することは困難であろうことが課題として残った。しかしながら、保護者の保育実践への参加の実施を検討する園にとっては、本研究で得られた知見を、予測可能性の側面から活用でき、すでに実施している園については、適切な介入の側面から活用できるものと考えられた。

引用文献

- 長谷川孝子 (2015) 保育参加導入に関する保育者の意識についての研究. 清泉女学院短期大学研究紀要, 33. 9-18
- 池本美香 (2014) 日本の幼児教育・保育制度における親の参画の現状. 池本美香 (編著) 親が参画する保育をつくる 国際比較調査を踏まえて. 勁草書房.
- 岩本一盛・齋藤政子 (2016) 「日日保育者体験」に参加した親の子育て意識の変容. 明星大学研究紀要—教育学部, 6. 51-63
- 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説. フレーベル館. 135
- OECD (2018) Poor children rich countries: Why we need policy action, Policy brief on child well-being, 1-8.
- 島津礼子 (2014) 幼稚園の「保育参加」における学びの生成について. 保育学研究, 52(3). 34-44
- 島津礼子 (2015) 保護者の保育参加に関する研究—子育て支援における協同的な学びの視点から—. 広島大学大学院教育学研究科博士論文.
- Yrjö Engeström (1999) Learning By Expanding. 山住勝広・松下佳代・百合草禎二・保坂裕子・庄井良信・手取義宏・高橋登 (訳) 拡張による学習—活動理論からのアプローチ. 新曜社.